研究所だより

第４９４号
２０２６年　１月　９日
発行：土佐清水市教育研究所
ＴＥＬ　８２－３０１５

“ たこたこあがれ　風よくうけて　　雲まであがれ　天まであがれ
　絵凧に字凧　どちらも負けず　　雲まであがれ　天まであがれ
　　あれあれさがる　引け引け糸を　　あれあれあがる　離すな糸を ”
『 たこのうた（凧の歌）』1911（明治44）年　文部省唱歌

寒中お見舞い申し上げます

～ 冬来たりなば、春遠からじ ～

穏やかで、暖かかった元旦。水平線上には雲がかかりましたが、神秘的な雲海越しの初日の出を拝むことができました。暦の上では5日は「小寒」。この日から「寒の入り」となり、節分までが「寒の内」と呼ばれ、冬の寒さが一番厳しくなる時期の始まりです。小寒は、寒さの時期ではありますが、地中ではセリが生え始めたり、凍った泉の氷が溶け始めたりと、春へ向けて少しずつ動き出す頃です。また小寒は、お正月気分が抜け、仕事などの活動が本格的に始まる時期でもあります。背筋を伸ばし、新たな一歩を踏み出したいですね。

各校では3学期が始まり、子どもたちも先生方も新年の決意も新たに、やる気に満ちあふれているのではないでしょうか。

全国的にインフルエンザ流行シーズン中で、例年より早いペースで感染が拡大しているようですので、引き続き基本的な感染予防対策「密を避け、手洗い、うがい、マスクの着用、換気」等を徹底しながら過ごしましょう。

月刊日本教育　令和8年/1月号（抜粋）

～日本の将来を語る～

学校現場の多様性と、求められる子ども支援

齋藤（さいとう）　大地（だいち）（宇都宮大学共同教育学部准教授）

その子どもの良さを見つける

私が関わっている小学校で、多様性への対応という点で参考になると思われるケースがあります。その学校では、キャリア教育の視点を大切にした研究・実践に取り組んでいました。私は、以前、キャリア教育とは「働くということにいかにつなげていくか」にポイントがあると思っていましたが、しかし、キャリア教育には、いわゆる「ワークキャリア」だけではなくて、人生全体の「生き方」や「ありたい姿」など、より広い概念（ライフキャリア）で捉える視点があります。

同校では、小学校の段階では、職業にフォーカスを当てるのではなく、「生き方」などに重点を置いた取組を重視するという考え方でした。また、特別支援学級でも通常の学級でも、先生たちがキャリアカウンセリング的な視点を持って指導に当たっていました。

キャリアカウンセリングとは、ひと言で言えば、その子どもの良さを見つけていくというものです。その子どもがこれからの人生で、何を得意とし、どんな点に可能性があるかを見いだしていきます。このような視点に立って、「今、あなたにはこんな良いところがある」と言葉にして本人にきちんとフィードバックします。先生と子どもとの間にこうした関係性が成立しているためか、先生たちの子どもへの「眼差し」が非常に柔らかいと感じました。単なる指導ではなく、その子どもの良さを見つけるという発想の転換が、学校の雰囲気を大きく変えていました。

その学校の校長は、大学時代に特別支援教育を学んだとのことで、研究発表会などでも通常の学級と特別支援学級を同列に扱って、一緒に発表するようにしていました。このように、学校の管理職が特別支援学級や通級指導教室を大切に思っていることで、教師全体の眼差しも柔らかくなり、子どもたちの意識にも影響を与えているのだろうと感じました。

代替できる学びの工夫

通常の学級の中では、障害のある子どもとない子ども、あるいは、特別支援のニーズがある子どもとない子どもが、はっきり分かれているのではなくて、その間には非常に緩やかな傾斜があるのが現実です。ですから、例えば、教科学習などにおいても、ユニバーサルデザイン的な考え方に立って、誰にとっても分かりやすい授業をするだけで、支援ニーズがなくなる子どももいます。ただ、そうした分かりやすい授業をした上で、個別的な支援が必要な子どもも出てきますので、そうした子どもに対しては、「合理的配慮」の視点から、具体的な支援をすることが求められてきます。

例えば、文字の読み書きに困難を抱える子どもたちは、国語科だけでなく、すべの教科で困っている状況にあります。ですから、「何度も書いて覚える」とか「繰り返し音読して、なめらかな読みができるようにする」という従来の方法ではなくて、障害の状況に応じて、代替となる学び方を工夫していくことで、先生も子どもも無理のない学級運営になっていくと思います。

つまり、まずは全員にとって分かりやすい授業をして、それでも困難を抱えている子どもに対しては、訓練的な関わりではなくて、その子どもがやりやすい学習環境を提案していくことが重要です。

なお、ICT機器の活用は、まさに「合理的配慮」の視点からも大切ですが、先生方の知識やスキルにかなり依存することがある点に難しさがあります。また、知的障害のある子どもたちは、考えることに困難さもありますが、生成AIなどを活用して補助的にサポートする試みなども始まっています。また、通級指導の学級では、作文が苦手な中学生に対して、「AIと対話しながら、作文をしてみよう」という事例も生まれています。

先生方に余白の時間の保障を

現在は、少子化が進行しているにも関わらず、支援教育の対象に含まれる子どもたちが増え続けています。しかし、一方で、多様化する子どもたちの現状からすると、特別支援学校や特別支援学級などでの対応は限界があり、通常の学級において、よりインクルーシブな環境を実現していく必要性が高まっていると言えます。

そのためには、先生方に「余白の時間」を保障していくなど、学校における働き方改革を進めて、余計な負担をかけないような工夫が求められています。そうした先生方への負担の増大は、子どもたちにも悪影響を与えかねませんので、管理職の方には、先生方が働きやすい環境の整備を実現していくことを期待したいと思います。

（高知県心の教育センター　Q－Uに関する資料より）

「ふりかえり」から「来年度」に向けた計画を

～ 不登校予防・支援のための年間計画の作成について ～

不登校に対する取組は、次の3点を同時に進めていくことが必要です。
①再登校 ②安定登校 ③予防・早期対応

この中でも、特に大切な取組は、③の予防・早期対応であるということは言うまでもありません。予防の中心は、学級経営であり、毎日毎時間のよく分かる楽しい授業です。早期対応の中心は、日常観察・面接・検査等による取組です。特に、学校3大ストレスと呼ばれる「①友人との関係、②学習の定着、③先生との関係」をどのように向上させていくのかが大きな鍵を握っています。

1　3月末までにしておくこと

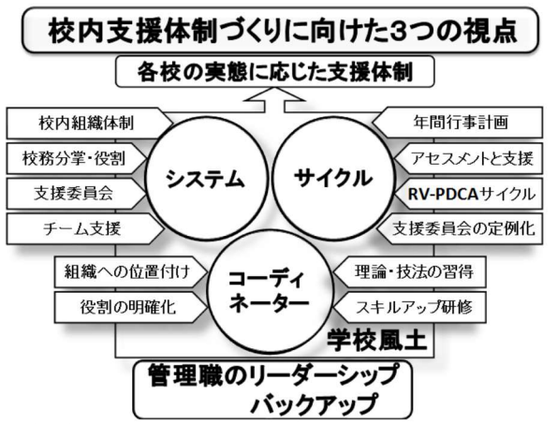
（1）　子どもとの信頼関係をつくるチャンスです

年度末は、子どもたちや保護者との信頼関係を再構築する大きなチャンスです。休んでいた子どもの中には、年度末の2～3月にかけて、再び登校を始めたり、学校に来る日数が増加する子どもたちがいます。その子どもたちについては、学校に来ている時のかかわりを大切にします。学校を完全に休んでいる児童生徒には、継続的な家庭訪問や保護者面接等のかかわりの中で、本年度のがんばりを一緒にふりかえることが大切です。自己肯定感が下がっている子どもが多いので、小さなことでもがんばったことを認め、励ましていきます。

教育支援センター（適応指導教室）がかかわっているケースについては、教育支援センターも参加してのふりかえりをします。子どもや保護者の現状や願いを受けて、年度末から春季休業中の支援の仕方、始業式から始める年度初めの受け入れについて確認していくことが必要です。この年度末から春休みにかけての取組が大きなチャンスになります。

（2）　学校での取組、一年間のふりかえりを

まず、3月末までにしておくことは、本年度の取組の成果と課題を正確にふりかえることです。また心の教育センターが作成した『校内支援体制づくりに向けた3つの視点』を参考にしてください（右図）。学校の規模や実態に応じた支援体制をつくることが大切です。この図は、管理職のリーダーシップやバックアップをもとに、システム・サイクル・コーディネーター（校内支援体制を推進するリーダー）の3つの輪がうまく回転し、子どもへの援助が進んでいるイメージを表わしています。



不登校状態にある子どもをチームで支援するためには、まずその子の状態を見立てる（アセスメント）とともに、支援の方向性を一致させ、具体的な対応をしていく援助チームを編成することが大切になってきます。その役割を担うのが、校内支援委員会（コーディネーション委員会）です。担任を支援する体制が機能している学校では、校内組織に位置づけられ、生徒支援委員会、生徒指導委員会、教育相談委員会等と呼ばれ、定期的に開催されています。

不登校の子を担任する教師を支援するポイントは、支援の中心となるのは担任や学年ですが、見立てや対応を担任・学年まかせにしないということです。

◇書籍紹介◇

新しい本を購入しました。読んでみませんか。
書籍の貸出も行っていますので、ぜひ教育研究所へお越しください。

①「教師が悩んだときに読む本」

編著者：諸富　祥彦・教師を支える会　　（図書文化）

本書は、いま多くの悩みを抱えながら何とか教師を続けている、あなたのための本です。中心は、第4章の教師の手記です。ここを読むと、「ああ、同じ悩みを抱えて、何とか辞めずにきた先生はほかにもいるんだなあ」「こんなふうに悩んでいるのは私だけじゃないんだ」と実感できる一冊です。

②「教師・スクールカウンセラー・保護者のためのいじめの本質と予防・対応
いじめの『空気』は変えられる！　教室の小さな変化の起こし方」（小学校編）

著者：諸富　祥彦　　（図書文化）

いじめの本質は「空気」です。ここにいじめ問題のむずかしさのすべてが集約されています。この「空気」にはとても逆らえない。「空気」を変えるなんてとても無理。そのような無力さが、いじめにはあります。だから、いじめ問題はむずかしいのです。

本書では、いじめのない学校や社会の実現に向けて、著者のカウンセラーとしての臨床経験を通して捉えた「いじめの本質」をひも解きます。人はどのように「空気」に支配されていくのか。どのようにいじめが止まらなくなっていくのか。それを破るものは何なのか。「4つの心のパーツ」を通して解き明かしていきます。これらを踏まえたうえで、学校全体で取り組む「脱いじめ教育」「脱いじめプログラム」を提言しています。さらに、いじめが起きてしまった場合の対応や子どもや保護者との面談の持ち方についてのポイントについても解説している一冊です。

③「教師・スクールカウンセラー・保護者のための不登校体験の本質と予防・対応
学校に行けない『からだ』」

著者：諸富　祥彦　　（図書文化）

本書は、著者の40年近くに及ぶ不登校の子どもたちと保護者とのカウンセリング体験を踏まえ、魂をこめて綴ったものです。著者が使っている「具体的な技」もたくさん示しています。ぜひ学校の先生方、保護者のみなさん、スクールカウンセラーの方々、その他、教育関係者のみなさんに読んでいただきたい一冊です。